

2014年10月5日 主日礼拝

説教「嵐の湖で」

マタイの福音書14章22-33節

【不安の学校・パートII】

先週の「パンの奇蹟」に続く不安の学校がここでも開かれました。この学校が教えることは、主イエスを信じることです。そのために、主イエスは弟子たちだけで、舟に乗り込ませました。「しいて」(22)とあります。弟子たちはいやがったけれども、主イエスは、あえてそうさせたのです。

【祈られる主イエス】

そして、主イエスは祈られました。「そして群衆を解散させてから、祈るためひそかに山へ登られた。夕方になっても、ただひとりそこにおられた」(23)とあります。主イエスのこのときの一番の関心は弟子たちにあります。このときばかりではありません。主イエスの関心は、いつもご自分ではありません。私たちです。だから、主イエスは弟子たちのために祈られました。ゲッセマネの祈りのように、自分を投げ出し、注ぎだし、与えようと、主イエスは地に伏して祈ってくださったのです。

それは、弟子たちが逆風の湖で守られるように、とただそれだけの祈りではありません。湖という不安の学校で弟子たちが、訓練を受けて成長することができるようにという祈り。主イエスを信頼することができるようにという祈

り。そのために主イエスは身を投げ出して祈ってくださったのです。私たちのために、今も主イエスは祈ってくださっています。

【わたしである】

やがて、主イエスは弟子たちのもとに向かわれました。私たちが不安に悩むとき、主イエスはそこにおられます。人任せにはなさないのです。「海の上を歩いて」(24)行かれたのは不思議ではありません。水だろうが、火だろうが、主イエスが私たちのところにきてくださることを、止めることはできないからです。幽霊だと恐れる弟子たちを主イエスはお叱りにならず、「しっかりするのだ、わたしである。恐れることはない」(27)と言われました。「だいじょうぶだ。私が来たよ。私なのだから、恐れることはないよ」と、おっしゃった。「わたしだよ」と。これほどの慰めの言葉はありません。主イエスがおっしゃったのですから。

【つかまえる主イエス】

ペテロは、主イエスを喜んで「わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください」(28)と、かわいらしいことを言いました。主イエスのところに行きたい、と。ところがペテロは、「風を見て恐ろしくなり、そしておぼれかけた」(30)のです。けれども、主イエスは叱る前に、まずペテロをつかまえてくださいました(31)。しっかりとつかまえて、水の中から引き抜いてくださった。それから、「信仰

の薄い者よ、なぜ疑ったのか」(31)とお叱りになったのです。この順序はたいせつです。クリスチャンは案外、イエスキリストを信じて疑うな、疑ったら失敗する。疑わなければ成功する。そう言って済ましてしまうことがあります。しかし、主イエスは私たちが疑ってしまう存在だということをご存じです。だから、主イエスは、ペテロをつかまえました。疑う私たちをつかまえてくださる。だから、妙な言い方だけれど、安心して疑ってもいいのです。疑って、沈んでも、主イエスがかまえてくださると、そこまで主を信じたらいいのです。自分の信仰の立派さを頼りにするのではなく、主イエスを信じるのです。つかまえてくださる主を信じるのです。

【神とはどういうお方なのか】

マタイはとても大切な一文で、このできごとを締めくくります。「ほんとうに、あなたは神の子です」(33)です。教会でいつも語られているのはこのこと。牧師だけではなく、クリスチャンはみな、神がどのような方か、知っています。そしてそれを語るのです。神とは、人となって、私たちの仲間となってくださった方。おぼれる私たちを、人生の海の嵐から引き上げてくださるお方。そして、私たちをつかまえるその手には傷があるのです。十字架の傷が。神は私たちを愛して、ご自分を与えてくださるお方。私たちのために何も惜しまないお方。私たちのために十字架に架けられたお方なのです。